

第Ⅳ章 阿蘇谷の古墳（関連資料の紹介）

1 迎平古墳群と出土鏡

迎平古墳群 一の宮町大字手野字迎平・橋詰・的場に分布する古墳である。墳丘は旧状を留めぬものもあるが、かつては8基以上の古墳が分布していた。今日5基が存する。昭和54年10月一の宮町文化財保護委員会の諸氏と現地踏査を行い古墳の確認とともに番号を付した。尾籠と手野を結ぶ道を接にして西側が小字迎平であるが、ここに1～3号墳が位置する。外輪の山麓斜面にあたり、一帯は「塚ノ園」（つかんその）と呼ばれている。道の縁に直径約10m、高さ約3mの円墳がある（5号）。さらに道から下った水田中に直径4.3m高さ約1.5mの封土がみられる（4号）。以上が墳丘の残存するものであるが、南側に明治年間に朱のついた平石が出土したという箇所がある（7号）が、道路拡幅によって石材は失われた。また4号の北側の三城高氏宅からは昭和28年畑を耕作中石棺が出土、直刀を伴出したという（8号）、さらに5号墳の南の畑の縁に石材が寄せてある（6号）。この古墳は圃場整備にともない昭和50年に破壊され、石材が旧位置に集められている。安山岩質の扁平礫がみられ、奥壁とみられる大石が南

- | | |
|------------|------------|
| 1 宮 後 | 15 杭 木 |
| 2 宮 の 前 | 16 灰 取 |
| 3 神 宮 司 | 17 桑 の 元 |
| 4 橋 詰 | 18 三 竹 寺 |
| 5 迎 平 | 19 平 井 |
| 6 年 の 神 | 20 中 園 |
| 7 堀 田 | 21 平 園 |
| 8 的 場 | 22 河 原 田 |
| 9 八 反 田 | 23 土 井 |
| 10 盤 名 木 | 24 土 井 平 |
| 11 川 久 保 | 25 外 園 |
| 12 一 の 生 婦 | 26 北 湯 の 口 |
| 13 当 の 木 | 27 湯 の 口 |
| 14 迎 田 | 28 尾 籠 田 |

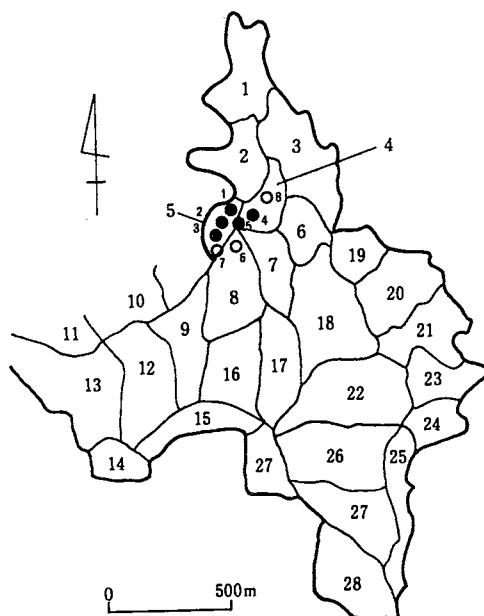


Fig.9. 手 野 小 字 名

面しており、この部分は旧状を保っているとみられる。これらの石材から推定すれば、南に入口をもつ横穴式石室墳であったとみられる。なお、この古墳の破壊時に鏡が出土して地元に保管されている。

鏡 環状乳神獸鏡で半分を欠失する。破れ口は古い。鋳上りは良好であるが、鏡面は取りあげた後の鋳痕がある。文様の間には赤色顔料がわずかに残っている。

平縁は二区に別れて外側は交互して連続する波状文が描がかれているが、鋳上りが悪く不鮮明な箇所がある。内側は外帯よりやや低くなり逆時計廻りに飛鳥走獸がみられる。湯廻りが悪く盛上り内側の圈線と接続している箇所がある。内区への移行部は外行する鋸齒文帯をめぐらす。内区は半截円と方格を交互に配しているが、方格の中に文字はない。内区は復原すれば8個の乳を持つとみられるが4個が現在する。環状乳を腰部とする右向の獸は頭部が虎形をなし口に巨を銜える。紐座は扁平で頂部がやや平坦化している。

直径14.0cm、紐高0.85cm、紐径3.05cm、紐穴の最大幅1.0cm、紐穴の高さ0.6cmをはかる。

この鏡は宇土郡不知火町国越古墳出土のものと同型である。この古墳は1966年に乙益重隆氏等によって調査された全長62.5mの前方後円墳で、石室の屍床および石棺から多量の遺物が出土した。鏡は、石棺内から画文帯神獸鏡一面、東屍床内から四獸鏡一面、西屍床内から獸帯文鏡一面が出土している。

国越古墳出土のものは迎平鏡に比し径がわずかに小形であるが文様間の寸法等は同一である。とくに違えるのは、紐の頂部の形状が迎平鏡が扁平であるのに対し、国越のものは半円球状をなす点である。このような差は踏返しによって生じた違いとみてよい。なお塩塚古墳出土の画文帯環状乳神獸鏡と同型の例は上記の国越古墳の外に次の4ヶ所のものが知られている。

- (1) 福岡県嘉穂郡穂波町技国・石ヶ坪・山ノ神古墳
- (2) 宮崎県児湯郡高鍋町・持田20号墳
- (3) 熊本県玉名郡菊水町江田・船山古墳
- (4) 香川県綾南町羽床小郡・蛇塚古墳

主に九州地方に分布している点が注目される。地域的にみても独立した阿蘇盆地の小古墳から出土した鏡が北・中九州に一連の繋りを持つことの意味は重い。

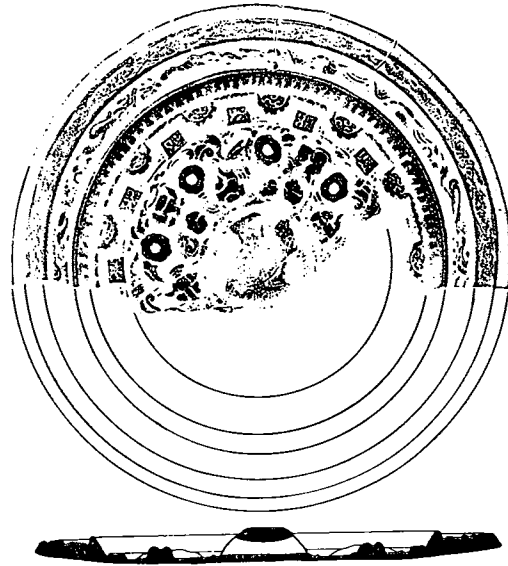


Fig. 10. 迎平 6 号墳出土 環状乳 神獸鏡

2 阿蘇神社所蔵の須悪器・土師器

提瓶 (Fig.11、1・2) 1、法量は口径；5.9、器高；18.5cmを測る。頸部にはヨコナデによる稜を有する。口頸部は外上方に立ち上がり、口縁部でやや内傾させる。体部・前面の張り出しはあまり大きくなく、ゆるやかな丸味をもって底部へ続く。肩部には左右にハリツケの把手を有する。体部前面はヘラ削り後ヨコナデ、背面はカキ目が施されている。体部中央には、前・背面ともヘラ状工具による「×」印を有する。

2、提瓶の口縁部をわずかに欠損する。体部前面はほぼ球形を呈する。体部背背面、後部はヘラ削りを行なっているため明瞭な稜を残し平坦面を有する。一方、背面前部は偏球形を帯び底部へいたる。肩部には左右に貼付の吊手を有するが端部はいずれも欠損する。口頸部には横方向のカキ目が施されている。体部には幅2～3mmの5条の同心円状の凹線が施されている。それらの凹線の間には櫛状工具による列点文を配する。この列点文は時計回り方向に粘土が動いているため、ロクロの回転を利用して、左右向より軽く突いたものである。さらに底部には部分的ではあるが列点文と同様な工具によるひつき痕が観察され、その後ナデ調整が施されている。部分的ではあるが焼成時における気泡を有する。

高坏 (Fig.11・3) 脚部に比べて坏部の占める割合が大きい、短脚の無蓋高坏である。法量は口径；11.5、器高；9.6、底径；9.4cm（復原）を測る・口縁部と体部はヨコナデによる稜をもつて分れ、受け部を意識している。立ち上がりは長く3.2cmを測り、直に上方に立ち上がり口縁部でやや外反させる。脚部は短く外下方に「ハ」字状に開く。脚、端部は短く、外下方につまみ出され外面を軽くナデているため端部外面はやや窪む。さらに脚部内面にわずかな粘土の隆起痕が観察され、坏部と脚部は接合されたものと推定される。口縁部から受け部にかけてはヨコナデ、体部から底部にかけては回転ヘラ削り、脚部はヨコナデが施されている。内面は全体的にヨコナデが施されているが、坏・底部には部分的に指圧痕が残るその後不定方向のナデにより調整されている。

高坏 (Fig.11・4、土師器) 高坏の坏部から脚部の一部にかけての残存である。法量は口径；23.7cmを測る。坏部は技法上の稜をもって上半部と下半部に分かれる。下半部は内弯気味に外上方に、上半部は外反気味に立ち上がり、口縁端部は丸味を帯びる。坏部と脚部は明瞭な痕跡は残さないが接合によるものと推定される。器の調整は全体的に非常に丁寧である。外面、口縁部下方は荒い縦方向のハケが施されその後斜、横方向のヘラ研磨により調整されている。坏部から脚部への移行部は指圧痕と部分的にハケ目が観察される。脚部は坏部と同様に緻密な縦方向のヘラ研磨を施す。内面の上半部も外面と同様に横、斜方のヘラ研磨が、下半部はやや荒い斜方向のヘラ研磨を施す。脚部はヘラ状工具の先端で刺突させながら回転させたような削り痕を残す。色調は内面、茶褐色、外面；暗茶褐色を呈する。

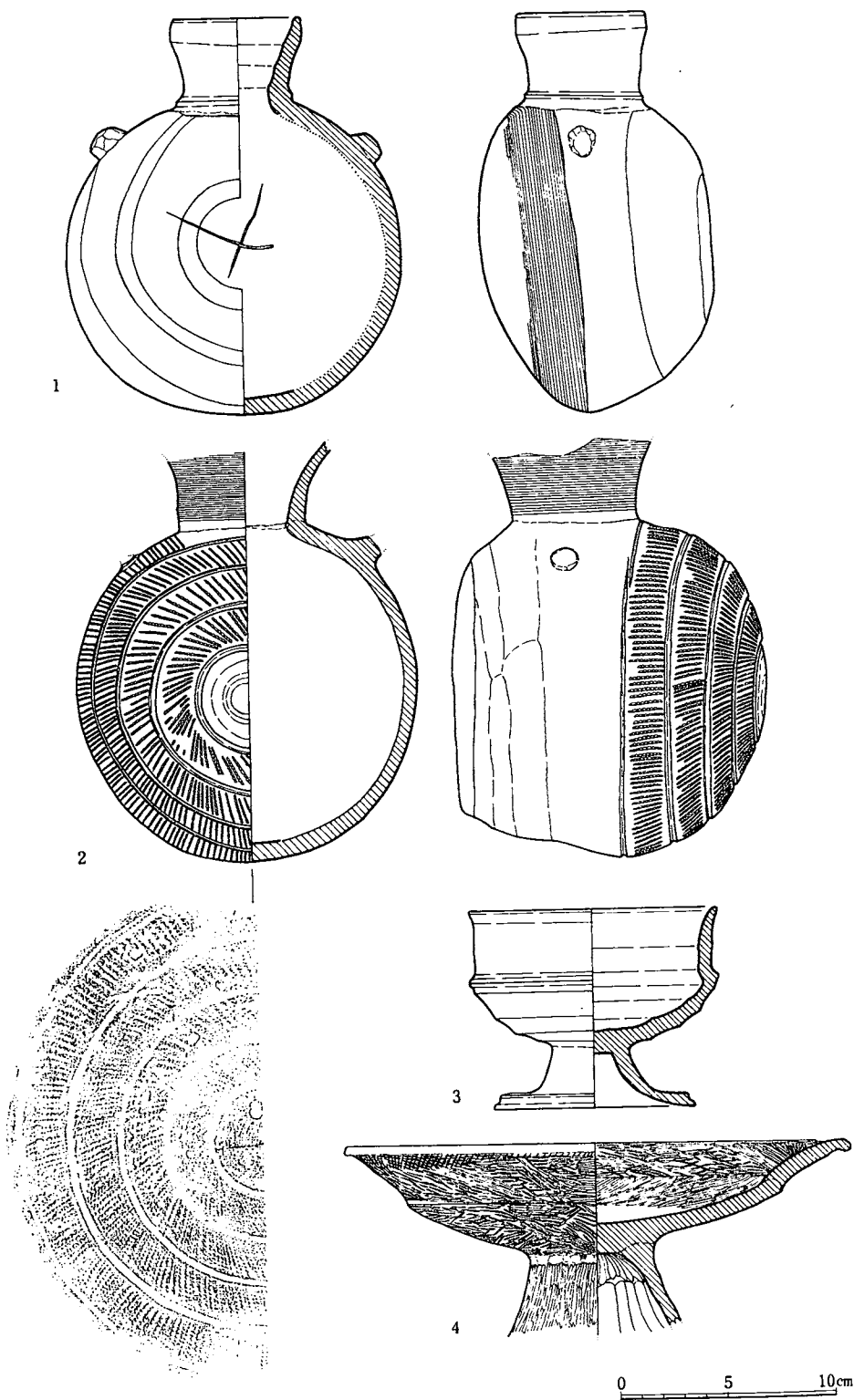


Fig. 11. 阿蘇神社所蔵須恵器(1～3)・土師器(4)

3. 番出一号墳

1. はじめに

阿蘇谷に分布する古墳としては、中通古墳群が著名である。この古墳群は長目塚古墳（前方後円墳・全長111m）を主墳として14基以上の古墳が知られており、阿蘇谷最大の古墳を形成している。さらに、この中通古墳群から北東方向、手野地区には4カ所の古墳群が知られており、それらの分布と年代については既に乙益重隆氏により詳細な考察が加えられている¹⁾。

今回紹介するのは、従来より石棺の存することは知られていたが調査が充分でなく、内容の明らかでなかった坂梨地区の石棺の一例である。

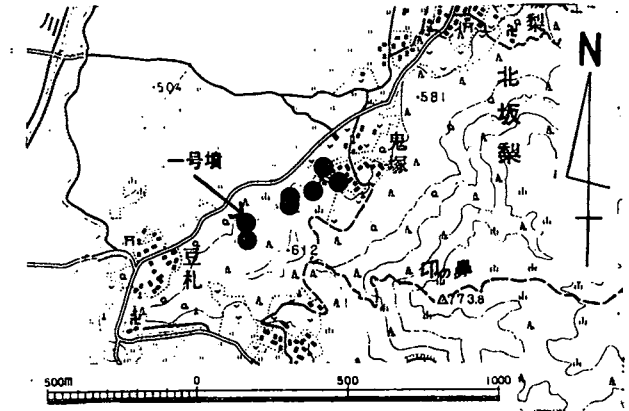


Fig. 12. 番出古墳群の分布

2. 石棺の構造

石棺は一の宮町大字中坂梨字番出（132番地）に所在する。場所は阿蘇谷全体を一望することの出来る外輪山の中腹傾斜面で標高約500m、豆札の集落の北東部あたり、水田面との比高差は約30mをはかる。凝灰岩のバラスを採取する石切場の削平中に発見されたもので、調査時には既に棺身の周辺は削布され、石棺の東小口部と南壁は取りはずされており、遺物は発見者により棺外に持出されていた。主体部は板状節理の安山岩を使用した組合せ式石棺で、大略長軸は東西を示す（Fig. 13）。側壁には大きな平石を2枚組み合わせているが南側壁はさらに小平石を用い、合わせ部の補充となしている。棺底には細長い平石を三枚組み合わせ並置している。蓋石は扁平な大型の一枚石を用いる。棺材の端部の要所には丁寧な敲打痕が見られる。また棺の内面には赤色顔料が厚く塗布されている。棺内は土砂等の流入もなく旧状を保っていた。石棺は赤褐色の地山に土壌を作り、さらに小口部、両側壁部を据え固定させるため溝状に一段深く掘り下げている。土壌は方形で東西長約4m、南北長約2m、深さ約0.9mで二段に作られていた。また棺底から地表面まで約1.5mで、0.5mの黒色土による低い封土が認められた。

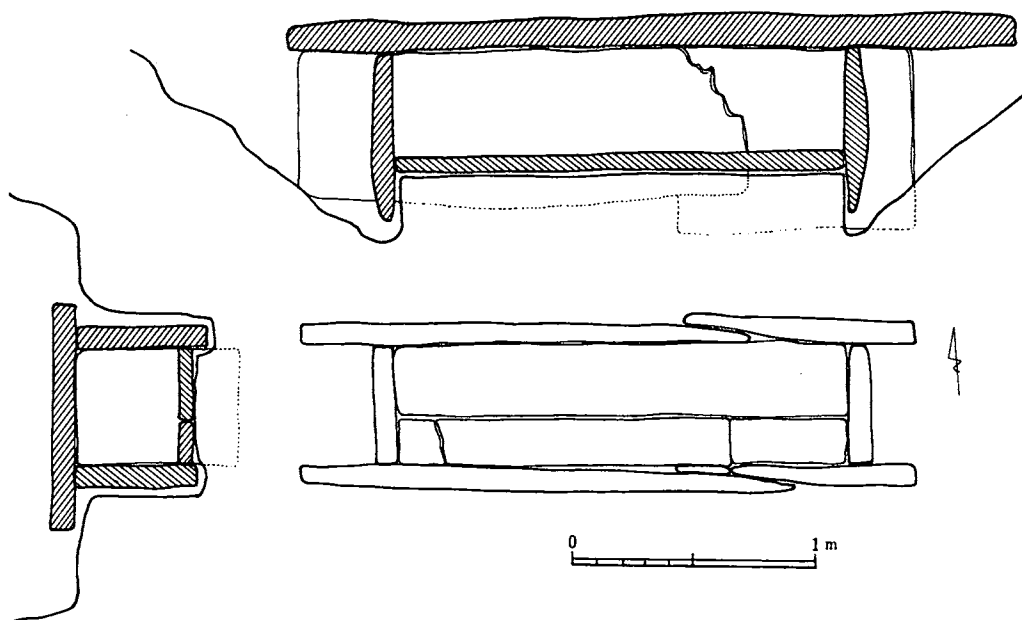


Fig. 13. 石棺実測図（東小口部・南側壁は復元した）

3. 遺物

発見者の言によると、東側の小口部を取り除き、そこから鉄棒を挿入し遺物を取り出したとのことである。遺物の配置状態を聞き取りにより復原すると、頭骨が東にあり、その南に鏡、中央部に鉄刀、鉄剣があったという。なお蓋石を除去した後、棺内を観察したところ、櫛の破片が見られた。

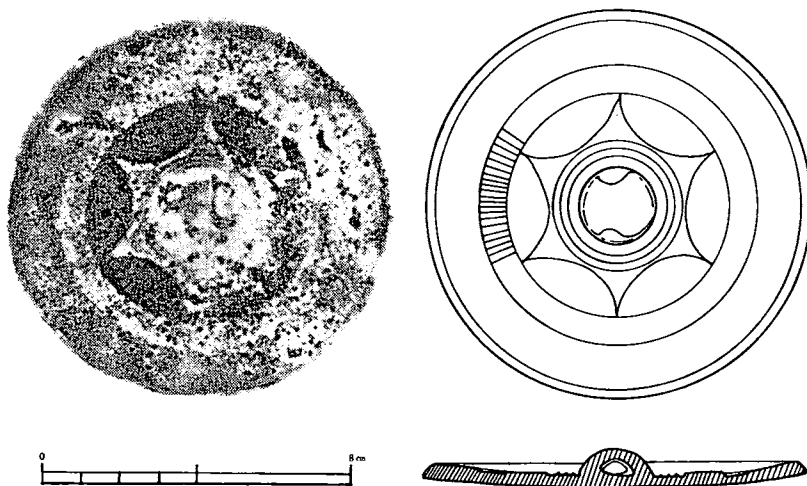


Fig. 14. 鏡の拓影（左）と実測図（右）（1：2）

鉄刀 (Fig. 15・1) やや内彎気味の細味の刀で全長82cm、刀身長62cm、茎長20cm、刀幅は茎が2cm、刀中央部で2.2cmをはかる。茎には2カ所の目釘孔がある。茎にわずかに木質が残っている。

鉄剣 (Fig. 15・2) 茎の先端を欠くが、現存長46cm刃わたり39.8cm、刃幅は茎が1.4cm、関部が3.4cm、刃中中部で2.8cmをはかる。

鏡 (Fig. 14) 内行花文鏡で、背面は錆がつよく細部を明らかに観察しえない。鏡面からかるく傾斜して背面につづく外縁の最大厚は0.4cm、幅1.4cmの外縁は内に向って、しだいに薄くなり、その内側の幅0.6cmの外帯には紐部から放射状に配置した斜行の櫛歯文をめぐらす。内区は2弧の内行花文を配し、その内側に3条の円圈をめぐらし紐へとつづく。紐は径2.1cm、高さ0.8cmをはかる。面径10cm、反りは0.2cmをはかる。錆間からみえる鏡面は白銅質で保存は良好。

櫛 堅櫛の破片とみられるもので、1個体分。細い植物性材料を用いたもので、かがりより上の部分が残っていた。発見時に攪乱したために細片となっている。

4. 出土人骨

人骨は調査前に取り出されていたため埋葬状態は明らかでないが、発見者によれば頭蓋骨が東側にあったとのことであり、東向の伸展葬であったと推定される。副葬品の鏡は肩の部分、鉄刀・剣は体側部に置かれていたと考えられる。

1) **保存状態** 骨の保存は全体的に悪く、採集されていた骨も、頭蓋骨、下顎骨、上肢・下肢骨の一部で、風化がはげしい。骨の全面に赤色顔料が付着している。

・**骨蓋骨** 前頭骨・頭頂骨・側頭骨・後頭骨のいずれも右半部が残存し、顔面も右半部のみが残る。眉上

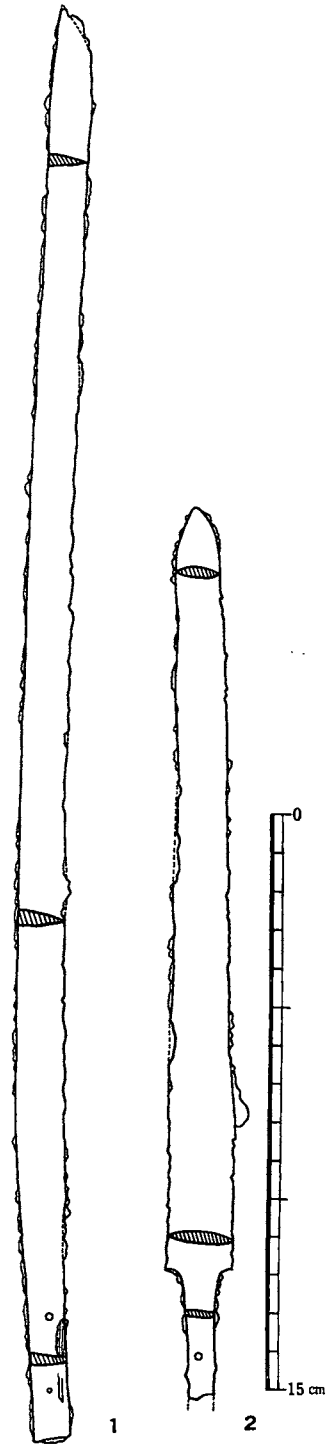


Fig. 15. 鉄刀 (左) 鉄剣 (右) 実測図

弓は強く隆起し、乳様突起が大きく突出する。冠状・矢状・人字縫合は、内・外板とも明瞭である。

・**下顎骨** 右半部の骨体部が残存し、PM¹・M¹・M²・M³が残存植立する。M³は萌出途中で、ほとんどが骨体内に埋まる。PMはいずれも遠近側にねじれ、特にPM²が強い。Cより近位の歯槽部がくずれており、抜歯（風習的とは限らない）あるいは他の原因によるものか明らかでない。

上・下顎骨の残存歯式は $\frac{6\ 5}{8\ 7\ 6}\frac{|}{4}$ で、 $\overline{8}$ を除いて、いずれも咬耗度は Broca 1°である。

四肢骨 保存悪く、左側上腕骨・橈骨・尺骨（いずれも近位部欠）と、右側橈骨骨体部、左側寛骨・大腿骨・脛骨が残存する。

恥骨の恥骨結合面の平行隆線は明瞭であり、背側縁が明らかになっているが、腹側縁・上結節は明瞭でない。

2) **性別** 寛骨が残存するも、大座骨切痕部・恥骨下枝が欠失しており、判定に困難を感じるが、頭骨の特徴から男性であると推定される。

3) **年齢** M³は萌途中で、歯の咬耗度が Broca 1°で、また恥骨結合面の特長よりして、若年あるいは、成年初期（20才代）であると推定される。

5. まとめ

石棺は上述のように破壊の途中の調査であったので細部を明らかにしえないうらみがあるが、問題点をまとめてみる。

1) 坂梨地区の石棺群 この石棺の周辺に6基の石棺が存することが確認出来た。したがって、これらの石棺を番出古墳群とよび、今回調査のものを一号石棺と呼ぶ。

2) 石棺の年代 底板を有する石棺は類例は多くないが、阿蘇谷では東手野古墳群のうち丸山の石棺（第1号）にみられる²⁹。番出と同様安山岩の石棺である。出土遺物のうち内彎気味の鉄刀は、長目塚古墳前方部の堅穴石室の副葬品にも2例が知られている³⁰。また玉名市大坊古墳の鉄刀も同例1振がある⁴¹。鏡は、長目塚古墳前方部の堅穴石室の副葬品と同様の内行花文鏡であるが、これは鏡径8.4 cmで、番出のものに比してやや小型である。共に仿製鏡とみられる。以上の点から、番出第一号石棺の時期を長目塚古墳と近似の時期、すなわち5世紀代のものと想定する。さらに、剣、櫛の出土も石棺が新しい時期のものでないことを示すものであろう。

3) 阿蘇谷の石棺 番出第1号石棺は、現在阿蘇谷で知られている多くの石棺のうち、最古のもの1つである。長目塚古墳等にもみられる大型の前方後円墳と同期に、地区を異にして、

このような小封土を有した石棺群の存することは注目される。阿蘇谷には、石棺を主体とする小古墳群が、阿蘇町西湯浦地区（二本松石棺群）、同湯浦（源太が塚石棺群）、同山田地区（山田古墳群）、高森町色見地区、白水町吉田地区などにみられる。調査が充分でなく明らかな点が少ないが、これ等のうち中通古墳群に先行する石棺、換言すれば、阿蘇谷の弥生時代から自己発展をとげて古墳を築造するに至った階層の墳墓が存在するのではないかと予測する。今後の調査が期待されるのである。

〔註〕

- 1) 乙益重隆「阿蘇谷の古墳群」『熊本県文化財調査報告』第3集 1952（熊本）
- 2) 同上
- 3) 坂本経堯「阿蘇長目塚」『熊本県文化財調査報告』第3集 1952（熊本）
- 4) 田添夏喜「熊本県玉名郡大坊古墳調査報告」『熊本史学』第32号 1967（熊本）

〔追記〕 この報告は1978年、九州考古学53号に江本直氏・木村幾多郎氏および島津の連名で発表したものである。今回の再録にあたっては新たに番出古墳群分布図を追加した。なお、調査にあたっては一の宮町教育委員会主事林 宏峰氏の協力を得た。石棺は現在一の宮町教育委員会の前庭に復原されている。

4. 阿蘇谷の古墳一覧

阿蘇谷の古墳についてははじめに、古く江戸時代から注目されるところであったが、明治から大正にかけてこれを踏査し学界に紹介されたのは中山徳五郎氏である（「阿蘇中部の旧跡及び古墳について」歴史地理第43巻第6号1925年）。その後、中通古墳中、最大の規模をもつ長目塚古墳の前方部が東岳川の改修により切断されることになり、それに伴い発掘調査が実施され、阿蘇谷の古墳について最初の学術的なメスが入れられた（坂本経堯「阿蘇長目塚」熊本県文化財調査報告第3集1962年）。この調査に際して乙益重隆氏を中心に中通古墳および下御倉・上御倉古墳の実測図が作成され、阿蘇谷の古墳の全体像が初めて明らかになった（乙益重隆「阿蘇谷の古墳群」熊本県文化財調査報告第三集1962年）。一方、阿蘇郡内の小学校に勤務されていた平岡勝昭氏は内牧地区にも古墳群が存することに注目され、その概要を発表された（「阿蘇谷の先史文化」熊本日々新聞1967年）。これ等の成果の上に立って、九州学院高等学校考古学部は阿蘇谷の野外調査を1967年以降開始したがその活動は熊本商科大学文化財問題研究会に引継れ今日に至っている。また1970年には熊本大学考古学研究室によって阿蘇町御塚横穴の発掘調査も行われている。今回の一覧は以上の成果を集約したものである。今後の調査によって更にその内容を豊にしていかななくてはならない。一覧表を作成するにあたり下記の方々から御教示をいただいた。御芳名を記して謝意を表する。

乙益重隆 平岡勝昭 中村耕作 清田純一 上野辰男 北窓正一 宮川 進 三島 格

	古墳（群）名	所在地	墳形	規模	主体部	出土品	備考
				(単位は m)			
1	塔の木	1 阿蘇町大字小里字原口	円墳	—	—	—	墓地 1(1～9)
2	2	2	円墳	—	—	—	墓地
3	3	3	円墳	22×11 高4	—	—	草地
4	4	4	円墳	—	—	—	茶畑
5	5	5	円墳	5×1.5	—	—	
6	6	6	円墳	—	—	—	消滅
7	7	7	円墳	—	—	—	
8	8	8	円墳	—	横穴式石室？	—	盛土なし、副葬品出土の伝承あり
9	9	9	円墳	—	—	—	
10	浜川 (1)	阿蘇町大字三久保字前浜川 上浜川	円墳	—	—	—	墓地 9(10～12)
11	(2)	2	円墳	—	—	—	墓地
12	(3)	3	円墳	—	—	—	墓地

	古墳(群)名	所在地	墳形	規模	主体部	出土品	備考
				(単位は m)			
13	御塚	阿蘇町大字宮原字前田	円墳	—	—	—	墳頂に記念碑あり 3(10~18)
14	1	〃	横穴	—	横穴	ガラス玉・刀子	1974年熊本考古学研究室調査
15	2	〃	横穴	—	横穴	—	杉山
16	3	〃	横穴	—	横穴	—	〃
17	4	〃	横穴	—	横穴	—	〃
18	5	〃	横穴	—	横穴	—	〃
19	源太ガ塚(1)	阿蘇町大字南宮原村上	—	—	石棺	—	標高620m 4(19~21)
20	(2)	〃	—	—	〃	—	原野
21	(3)	〃	—	—	〃	—	〃
22	二本松(1)	阿蘇町大字西湯浦字二本松	—	—	〃	—	5(22~26)
23	(2)	〃	—	—	〃	—	消滅 棺材は橋などに使用
24	(3)	〃	—	—	〃	—	
25	(4)	〃	—	—	〃	—	
26	(5)	〃	—	—	〃	—	
27	番出(+2)	阿蘇町大字内牧字番出	—	—	〃	—	石材の一部は内牧小学校に保管 6
28	宮山	阿蘇町大字的石字櫓山	—	—	〃	—	付近に弥生後期の竖穴住居址 2基あり 7
29	古園 (1)	阿蘇町大字狩尾字古園	—	—	〃	—	8(29~31)
30	(2)	〃	—	—	〃	—	
31	(3)	〃	—	—	〃	—	
32	古園	阿蘇町大字狩尾字古園	円墳	径4 高2	—	—	
33	村下 (+2)	阿蘇町大字小野田字村下	—	—	石棺	石棺の外に土師壺	石棺は長さ1.7m、幅0.75m 安山岩 10
34	今古閑	阿蘇町大字山田字今古閑	横穴	—	横穴?	—	11
35	勝負塚	一の宮町大字中通字勝負塚	円墳	径58.7 高11.4	—	—	墓地 12(35~48)
36	車塚A	〃	円墳	径47 高8	—	—	中通古墳群
37	B	〃	円墳	径17 高2.3	—	—	
38	入道塚A	〃	円墳	径25 高4.5	—	—	
39	銭亀塚	〃	円墳	径13 高2.5	—	—	
40	ウバガ塚	〃	円墳	—	—	—	
41	休塚	〃	円墳	—	—	—	
42	薬師の藪	〃	円墳	—	—	—	
43	上鞍掛塚A	〃	円墳 前方後円墳	全長65.5 高6.5	—	—	旧状は全長約71m
44	上鞍掛塚B	〃	円墳	径25.5 高3.8	—	—	復元すれば径35m以上
45	鞍掛塚B	〃	円墳	径21.5 高4.15	—	(伝)勾玉1・小玉330	
46	鞍掛塚A	〃	円墳	径33 高4.4	—	—	
47	長目塚	〃	前方後円墳	全長111.5 高9.2	前方部に竖穴式石室	鏡1・玉類・直刀・刀子・鉄鏃・鉄斧・ハニワ他	1949・1950年調査
48	中通古墳群(る)	〃	円墳	—	—	—	消滅

古墳(群)名	所在地	墳形	規模	主体部	出土品	備考
49 上御倉	一の宮町大字手野字西手野	円墳	(単位はm) 径33 高5.28	横穴式石室	—	} 13(49・50) 石室は複室
50 下御倉	〃	円墳	径30 高4	横穴式石室	—	
51 迎平古墳 1	一の宮町大字手野字迎平	円墳	—	—	—	14(51~58)
52 2	〃	円墳	—	—	—	
53 3	〃	円墳	—	—	—	
54 4	一の宮町大字手野字橋詰	円墳	—	石棺	—	
55 5	〃	円墳	—	—	—	15 1844年発見(59~61)
56 6	一の宮町大字手野字的場	円墳	—	横穴式石室	鏡 1	
57 7	〃	—	—	石棺?	—	
58 8	一の宮町大字手野字橋詰	—	—	石棺	直刀	
59 平井 (1)	一の宮町大字手野字平井	円墳	—	横穴式石室	剣2・短刀2・釧3 鍬10・水晶玉4 曲玉9・青玉管8 鉄2・土焼徳利3 土焼瓶 2・同腰 高菜子台 1・桃 実3	16(62~69)
60 (2)	〃	横穴	—	横穴	—	
61 (3)	〃	横穴	—	〃	—	
62 東手野古墳群 和田家墓地内	一の宮町大字手野	円墳	—	石棺	—	棺材のみ
63 丸山 1	〃	円墳?	—	〃	—	
64 丸山 2	〃	円墳?	—	〃	—	
65 秋葉権現塚	〃	円墳?	—	〃	—	
66 観音堂前	〃	—	—	〃	—	石棺近くに秋葉大権 現の石碑あり
67 武田勘吾氏宅	〃	円墳	—	〃	—	1948年発見、消滅
68 小嵐山	—	—	—	磐棺	鉄剣2・鉄鍬 土師器・甕 剣・玉・提瓶	17
69 大石平	一の宮町大字中通大石平	—	—	石棺	—	1948年発見、消滅18
70 番出 1	一の宮町大字中坂梨字番出	円墳	—	〃	鏡・直刀・剣 ・櫛	1979年調査移転19
71 2	〃	—	—	〃	—	5基以上20
72 3	〃	—	—	〃	—	
73 4	〃	—	—	〃	—	
74 5	〃	—	—	〃	—	
75 生出 (+2)	一の宮町大字三野字生出	—	—	〃	—	21
76 古城鼻(+2)	一の宮町古城・古城鼻	横穴	—	横穴	—	
77 勇子	一の宮町大字宮地字勇子	—	—	石棺	(伝)朱塊・銀 環	22
78 阿蘇神社福陵 1	一の宮町大字宮地	円墳	—	—	—	九州横断道路工事中 に発見、埋めもどす 23
79 2	〃	円墳	—	—	—	
80 三閑	一の宮町大字古城字三閑	—	—	石棺	なし	移転復原
81 三久保	阿蘇町大字三久保	横穴?	—	横穴?	—	
82 阿蘇町	—	—	—	磐棺	なし	不動が祀られている 24 外輪山頂25
83 一の宮町大字中通	—	円墳	—	横穴式石室	—	
84 不動塚	一の宮町大字宮地字塩塚	円墳	—	—	—	1974年消滅 26
85 尾籠	一の宮町尾籠	円墳	—	—	—	
86 塩塚	一の宮町大字宮地字塩塚	円墳	—	横穴式石室	馬具・鉄矛・ 小玉・勾玉	—

古墳(群)名番号の()付は呼称が確定していない事を示す。—は不明。(+)は複数存在するが基数が不明な事を示す。備考のゴチの数字はPLAN2と対応する。